

## 【曲目解説】

### ドビュッシー：牧神の午後への前奏曲

クロード・ドビュッシー(1862～1918)は印象主義の作曲家として知られ、近代フランスを代表する作曲家の1人です。「牧神の午後への前奏曲」は彼の代表作の1つで、自らの音楽語法確立の端緒となった作品です。この作品はステファヌ・マラルメの詩「牧神の午後」を音楽的に表現したもので、夏の午後に森蔭にいる半人半獣の牧神を描いた詩から、作曲家が受けた印象を自由に音で表しています。ドビュッシーはマラルメと親交があり、彼の家で行われた芸術家の集いに出席して大きな影響を受けました。そしてその結果1892年にこの作品が生まれたのです。初演は1894年12月22日に国民音楽協会の演奏会で行われましたが、その斬新な響きによりセンセーションを起こしました。

曲は甘美で色彩豊かな旋律からなり、幻想的な雰囲気に満ちています。半音階的な旋律のフルート独奏により静かに曲が始まりますが、この旋律は他のモティーフが提示されながら随所に登場することで、作品に統一性を与えています。

### ラヴェル：ピアノ協奏曲 ト長調

この協奏曲はモーリス・ラヴェル(1875～1937)の円熟期の代表作の1つに数えられます。

彼は1929年から2年間、パリ郊外のモンフォール・ラモーリーにある自宅にこもって毎日12時間作曲を続けました。そしてその時に2曲のピアノ協奏曲を同時進行で作り上げます。大編成のオーケストラを伴い激しい感情の逆りが見られる「左手のための協奏曲」とは対照的に、今回演奏するト長調の作品は規模が小さく伝統的な3楽章構成で、作曲家自身「モーツアルトとサン＝サーンスの精神にのつとて作曲した」と述べています。この協奏曲は、1931年に完成し、ラヴェルによれば当初は自らがピアノを弾くつもりだったそうです。しかし1932年1月14日にパリのサル・プレイエルで行われた初演では、ピアノの名手マルグリット・ロンがソリストを務め、作品も彼女に献呈されました。

**第1楽章**はピッコロによる軽快な旋律で生き生きと始まります。その後落ち着いた曲想になり、ブルースやジャズを想起させるさまざまな旋律が登場します。楽章の終盤にはカデンツァが置かれ、ピアノが華麗な技巧を披露します。そして最後は冒頭旋律によって力強く閉じられます。

**第2楽章**は甘美な緩徐楽章です。ピアノ独奏によるゆったりとした旋律で始まったのち、木管楽器を中心としたオーケストラが新たな旋律を奏します。その後短調になり緊張感をもってクライマックスに到達すると、曲は再び落ち着きを取り戻します。そしてコールアングレが冒頭の旋律を再現したのち、静けさの中に消え入るように曲が終わります。

**第3楽章**では終始急速なテンポで勢いよく曲が進みます。冒頭ではピッコロクラリネットやピッコロによる軽快な旋律が登場し、短調によるユーモラスな旋律がそれに続きます。その後6/8拍子に変わり躍動的な旋律が新たに登場し、これらの3つの素材が発展していき、最後は華やかに閉じられます。

### サン＝サーンス：交響曲 第3番 ハ短調 作品78「オルガン付き」

カミュー・サン＝サーンス(1835～1921)は多作なことで知られていますが、交響曲第3番は円熟期に書かれた最も重要な作品の1つです。

彼は10代半ばの時にパリ音楽院でオルガンを学び、また教会のオルガニストとしても活動しました。さらに音楽院では作曲も学び、若い時期から数多くの作品を生み出して、名声を高めていきます。さらに彼の名はフランス以外でも知られるようになります。特にイギリスでは、彼が1871年に初めてロンドンを訪問し、オルガンのリサイタルを開いて以降評判が高まりました。

そのような中で交響曲第3番はロンドンのフィルハーモニック協会の委嘱により1886年に作されました。そして同年5月19日に同協会の演奏会で行われた初演は、大成功をおさめたといいます。

この作品はオルガンを伴う特異な編成のため、「オルガン付き」という呼称で知られています。オーケストラ作品の中でオルガンを協奏曲的に用いる例は、すでにリストの交響詩「フン族の闘い」にも見られますが、サン＝サーンスの交響曲第3番はその手法をより大規模な交響曲に応用したものといえます。

曲は2つの楽章からなりますが、第1楽章はソナタ形式で始まったのち後半では緩徐楽章的になり、また第2楽章の前半はスケルツォ風ですがその後フィナーレに相応しい壮大な音楽が続きます。そのため実質的には4楽章の構成といえます。

**第1楽章**は短い序奏に始まり、小刻みに動く短調の第1主題が現れます。その後長調に変わり落ち着いた性格の第2主題が登場し、これらが発展、再現します。そして楽章の後半ではテンポを大幅に落とし、オルガンが登場します。ここではオーケストラとオルガンが甘美な旋律を展開していきます。

**第2楽章**は急速なテンポで幕を開けます。短調による新しい旋律で始まり、第1楽章の第1主題も再び現れます。その後長調に転調し、軽快な旋律が登場したのち、これらの要素が再現されます。特に長調の旋律が再現される際には、さらに新たな旋律が現れ、それがフーガ風に繰り返されます。そして後半部分はそのフーガ風の旋律で力強く始まり、その傍らでオルガンが高らかに和音を奏します。この部分では既出の旋律(主に第1楽章の第1主題)が力強い表情で発展しながら進み、最後は壮大に閉じられます。

(佐野旭司)